

## 書評

七木田文彦著：

健康教育教科「保健科」成立の政策形成：

均質的健康空間の生成

学術出版会，2010年

東京大学大学院・医学系研究科

国際地域保健学教室 神馬征峰

1945年，日本は第2次世界大戦に敗戦した。敗戦は，日本にとって幸いした，と同時に，多くの負の遺産をももたらした。特に戦前から戦後にかけて，さまざまな分野におけるよき遺産の継続性が分断されたのは極めて遺憾なことである。

その点，本書は，分断されたかのようにみえていた，戦前の「健康教育・衛生教育」から戦後の「保健科」の成立への継続性のプロセスを，詳細な文献研究によって見事に描き出している。特に「保健科」の成立に関する分析は極めて注目に値する。その成立にあたっては，実は終戦直後すでに文部省が自主改革として「第一次文部省機構改革」を規定しており，そのフレームワークのもとに，第1次米国教育使節団の報告書がまとめられた，というのである。

さて本書の成果は，戦前から戦後にかけての日本の歩みを理解するということだけに留まる

のであろうか？本書から得られたレッスンは何らかの国際的意義を有するのであろうか？途上国の学校保健に関心を持ち，途上国の学校における健康教育の確立をめざす者にとっては，本書の国際的意義という課題は大いに関心のあるところである。

その視点から本書を眺めてみると，結章にある以下のような記載は実におもしろい。

「子どもに衛生（教育）の教育を行い，子どもを介して家庭にまで衛生（健康）知識を普及させようとする学校衛生改革は，以上に示した背景から促進され，戦前・戦中・戦後の教育カリキュラムに健康教育教科として位置づけられた」。

実はこの内容は1978年のアルマ・アタ宣言当時に開始されたChild-to-Child運動の亜型であるChild-to-Family, Child-to-Communityの原型といえないこともない。とすると，日本はこの分野において，世界に発信しうる歴史的事実，知識，知恵がすでにあったのではないかとはいたくもなる。著者が国際的視野をもって今後さらに研究を続けられ，本書をこのまま国際的に発信し得るのか，本書の一部をなんらかの形で一般化して世界に発信できるのか，著者の今後の研究活動に大いに期待したい。